

## 第4章 スターリンの死と時代の終わり



スターリン時代、国民の記憶に深く刻み込まれた出来事といえば、その死を  
おいて他にない。大人から子ども、労働者や農民から知識人まで誰もがはつき  
りと覚えている。生き方の異なる国民すべての記憶の中で、スターリンの死は  
多様に反映されている。

### 1. 政治環境の変化

#### 1.1 スターリンの死

スターリンは1953年3月に亡くなった。彼はソ連の中でもっとも大きな権力  
を持った人物だっただけに、その死は共産党員、政府指導部や一般国民に驚き  
と衝撃を与えた。そもそも彼が死に至った背景には、2月に病気になったこと  
がある。党の幹部であったフルシチョフの発表では、スターリンは体調が悪く  
ても仕事を続けていたという。亡くなる前の晩は、共産党幹部と自分の別荘で  
映画を観たり、食事をしたりして過ごした。晩餐は夜遅くまで続き、彼は党幹  
部を見送ってから自分の部屋に戻った。フルシチョフによると、翌日は日曜日  
で、いつも休日には共産党幹部を別荘に呼んでいたが、この日は誰かに連絡し  
た形跡がなく、夜になって護衛官からフルシチョフ、ペリヤ、マレンコフ、カ  
ガノヴィチ、ヴォロシロフやブルガーニンといった党幹部に連絡が入り、彼ら  
が別荘に駆けつけた。そこで彼らはスターリンが自身の部屋で倒れているの  
を見つけ、すぐに医者を呼んだがすでに昏睡状態であったという。

スターリンの健康状態については、ある程度の情報は国民にも伝えられてい  
た。

私は小さかったけれど、ラジオが24時間体制でスターリンの病状を伝えていたのを知っている。2〜3分ごとに「こうなりました」、「ああなりました」とラジオから聞こえてきた。

まだ亡くなったわけではないのにマハツラ（近隣コミュニティ）の皆はもう泣いていた。その涙は見せかけなんかではなく、心からの涙だった。彼らにとってスターリンとは規律を大変重んじ、自分たちのために人生を捧げてくれた人だった。（証言者No. 16, ウズベク人, 女性, タシケント）

スターリンは倒れてから数日後に亡くなった。その死はすべての国民にとって大変な衝撃であり、国が変化することを意味していた。

人々はスターリンが亡くなるとは思ってもいなかった。スターリンの健康状態についてのニュースが流れると、何をしていても手をとめてラジオに集中するほど心配していたが、医者が救ってくれると確信していただけに、その波紋は大きかった。以下の証言からは、スターリンの死がまったく予想されていなかったことがわかる。

私が働いていた化学製品工場では、その日、工場長がカザフスタンのステップ地方で狩猟を楽しんでいたのだから、彼にスターリンの死のニュースは届いていなかった。工場では急速にスターリンの追悼集会を開かなければならなかったが、工場長不在ではできないので、彼を探すために軍用機まで飛ばした。しかし、居場所を突き止めることはできなかった。

そのことで共産党本部からチルク市共産党支部に、その工場長を共産党から除名し退任させるよう指示があったそうだ。チルク共産党の支部長は非常に賢い人で、本部から指示を受ける前に、すでに工場長に通告という形で処罰を与えていた。そうしたことで一度処罰を受けた人が再び同じ行為で処罰を受けることはないという党の決まりにより、工場長は退任も除名もされなかった。

後にその工場長は、ソ連の化学工業大臣、そしてソ連大臣会議副議長にまでなった。彼の名前はカスタノフという。あの時、チルク共産党支部長の立派な判断がなければ、カスタノフは除名され、出世はありえなかっただ

ろう。(証言者No. 26, タタール人, 女性, ナマンガン)

## 1.2 その後の政権争い

スターリンの死は、まず共産党や政府の権力争いの発端となった。その中でもスターリンにもっとも近い位置にいた部下のベリヤと、彼に反対するフルシチョフとその協力者の間で対立が深まった。

ベリヤは1940年代後半までNKVD (内務人民委員部) を仕切っており、スターリン時代の弾圧などを指揮した。多くの共産党員の取調べも行っており、彼らに死刑もしくは長期の服役を課すように働きかけた張本人である。彼はたまたまスターリンの怒りを買うこともあったものの、彼の信頼を得ていた。そのことから彼は大きな権力を握っていた。

スターリンの死後、彼の影響力は増すと思われた。それは内務省や秘密警察とのこれまでのネットワークを背景とした、現実味をおびたものであった。彼も自身の影響力を維持し拡大させようとしていた。

それに対して、フルシチョフと他の共産党幹部はベリヤの巨大な権力を牽制することを考えていた。その結果、1953年6月ベリヤの解任と逮捕・死刑が執行された。それがきっかけとなり、1956年の全ソ連共産党20回大会では、ベリヤのこれまでの犯罪行為の公表と、スターリン時代の弾圧に対する批判が行われた。ついに、スターリン時代の秘密主義政治が終わりを告げ、多くの共産党員の命が救われたのである。

さらに、これまでタブー視されていたイデオロギーに関する議論や、疑問視されなかった共産党の行為が再検討され始め、共産党内の混乱が国民にも知れ渡った。ある人はフルシチョフ政権への交代を以下のように記憶していた。

スターリンが亡くなり、フルシチョフが政権を握ってから混乱が始まった。レビジオニスト(共産党の政策の再検討を呼びかけた人たち)が出てきて、マルクスやレーニン、スターリンの教えを検討し始めた。

こうした政権争いは、戦争直後に行われたが、一般の人々は平和な社会でまじめに働いてお金を稼ぐことを忘れてしまっていた。人々は国からの助成や支援で生活していたので、国に頼りすぎている。(そのことから)生活

が豊かになることはなかった。(証言者No. 9, ウズベク人, 男性, タシケント)

## 2. 国民の目線から

### 2.1 国民の悲しみ

これまでも述べたように、スターリンの死はすべての国民にとって衝撃的な出来事だった。それに対する反応は人によって異なっていたが、人々の記憶から状況を再現すると、大きく三つに分けられる。まず、スターリンの死を個人的な悲劇として受け止め、心から嘆き悲しむ人。次に、その死により自分たちの生活や将来に不安を覚える人。彼らは、父親のような存在を失った喪失感と、これからの生活がどのようになっていくのか、不安を感じていた。そして限られてはいるが、その死を喜んだ人もいた。弾圧や命を狙われる危険性から解放された人たちである。

特徴的な点としては、これまでみたことがないほど多くの人が涙を流したことが挙げられる。軍人も農民・労働者も関係なく、外を歩きながらわれを忘れて泣いていた。以下のように、その死を軍に動員されている時に知った人もいる。

私は当時ソ連軍にいて、訃報をカザフスタンのジャズクルガンで知り、仲間と一緒に涙を隠すこともなく、子どものようにわんわん泣いていた。それくらいスターリンのことが好きだった。(証言者No. 45, タジク人, 男性, ブハラ州)

スターリンの訃報を聞いて泣いた人の数は驚くほど多い。ある人は国民のために貢献したその努力に感謝し、またある人は戦争を勝利へ導いてくれた功績を高く評価して涙を流したという。なかにはその状況に流されて、泣いていただけの人もいただろうが、大勢の人が泣いたことには違いない。果たして、レーニンが亡くなった際にこうした光景はみられただろうか。

あの時、国民全員が泣いていた。ソビエト国民があんなに泣いたのを私はそれまでみたことがなかった。スターリンの死があれだけ惜しまれた理由は、厳しい人だった反面、国民のことをよく考えていたからだと思う。（証言者 No. 11, ウズベク人, 女性, タシケント）

このような状況は政府のコントロールが強い都市部のみならず、農村部でもみられた。人々はスターリンの死をわが身の不幸のように嘆いていたことがわかる。

スターリンの死が知らされた日のことを私はいまだによく覚えている。その日は雨が降っていて肌寒かった。

私たちの村は都市から離れていて、電話があった郡の中心地までは8キロの道のりがあった。その郡の中心地から馬に乗った男の人が来て、亡くなったことを知らせてくれた。

私たちはすぐに学校に集められた。飾ってあったスターリンの写真にはいつの間にか黒い布がかぶせられ、皆2時間以上泣きながら立ったままだった。村の住民は、まるで自分の肉親を亡くしたように悲しんだ。（証言者 No. 40, ウズベク人, 男性, フェルガナ州）

ソ連各地で非常に暗い日々が続いたが、当時の出来事や人々の悲しみを以下のように冷静に分析する人もいる。このように、スターリンが時によって残酷な政策を実施してきたことを認識しながらも、彼に対する尊敬とその死を悲しむという矛盾する考えを有した人は多かったようだ。

スターリンは、恐ろしいほど厳しいやり方で国を統治してきたが、その厳しさの中に優しさがあるというイメージを人々にすり込むことに成功していた。だからこそ彼が亡くなった時、人々は外に出て大声で泣いたんだ。

スターリンへの哀悼として町の中では工場のベルが鳴り続け、ラジオからは訃報が流れていた。

スターリンが亡くなると、彼のやってきたことが批判されるようになり、

フルシチョフがその最前線に立った。それでも国民のスターリンに対する思いはそれほど変わらず、彼の人気はいまだに健在である。それはやはり、スターリン時代に皆の脳に埋め込まれた情報が生きているという証である。スターリンは確かに良くないこともたくさんやってきたと思うが、国のことも考えていたと思う。(証言者No. 29, ロシア人, 女性, コーカンド)

## 2.2 死がもたらす不安

政府はスターリンの遺体をモスクワの赤の広場にあるレーニンの霊廟に安置して保存することにした。国民に見せることで、スターリンは彼らのそばにいてという安心感を与えようとした。しかし、そのような行為は国民の心を大きく揺さぶり、混乱を引き起こしたにすぎなかった。

私の兄は当時モスクワに留学していて、スターリンの遺体が安置されている霊廟まで、とても長い列ができていたと話していた。皆誰かを押し倒してでもスターリンをひと目見たいという衝動にかられた。現に、押し倒されて亡くなった人も続出したという。

その列があった通りには人々の脱げた靴がいたるところに転がっていたそうだ。靴をなくしても気にならないほど、皆悲しみに打ちひしがれ、ただひたすら列に並んでいたらしい。(証言者No. 2, ウズベク人, 男性, タシケント)

悲しみと同時に、人々はスターリンの死を一人の指導者の死として受け止めるのではなく、生活の安定と向上への希望を打ち消す出来事としてみていた。次の指導者が誰になるのか、その指導者のもとでどのような生活を送ることができるのか不安を感じ、それが彼らのスターリンの死を悔やむ思いを一層深くした。

ウズベキスタン各地では追悼集会が行われた。集会への参加は政府に動員されたのではなく、皆自発的に行き、スターリンの素晴らしさを訴えた。このような集会はまず仕事場、工場や学校から始まった。当時、まだ幼かった人たちもその集会に参加し、その様子は彼らの記憶にはっきり残っているという。



タシケントの中心（革命広場、後のアムール・ティムール広場）にあったスターリンの記念碑の周りに、スターリンの死を悔やんで大勢の人々が集まった。【スターリンの死を惜しむ人々】

1953年のあの日のことはよく覚えている。朝、泣いている母に起こされたので、どうしたのと尋ねると、スターリンが亡くなったと教えてもらった。

私は急いで着替えを済ませると、学校へ走った。すでに人が集まっていたどこからかスターリンの大きな写真までが大教室に置かれていた。皆は、スターリンのことをどれだけ愛していたか口々に言い合い、永遠に忘れないと誓っていた。（証言者No. 24, ウズベク人, 男性, アンディジャン）

また別の人は学校の様子を以下のように語り、そこには教員の不安感が現れていた。

スターリンが逝去した時、私たちはまだ子どもだった。兄は学校から戻ってくると、その日の出来事を興奮した様子で話し始めた。

スターリンが亡くなったとラジオ放送があった時に、教頭先生が「私たちはこれからどうなる！」と泣き崩れ、意識を失ったという。その教頭先生は大変強く厳しい人として知られていたため、子どもたちはスターリンの死がどれだけ重大なことなのか、その時初めてわかったと言っていた。（証言者No. 35, ウズベク人, 男性, タシケント）

追悼集会は首都のタシケントだけではなく、サマルカンドやブハラといった都市でも行われた。サマルカンドのレジスタン広場は都市の中心にあり、多くの人が自発的にそこに集まってきた。なぜなら、そこは悲しみを分かち合うことのできる場所だったからである。そこに行くことでスターリンを少しでも身近に感じる事ができたのであろう。皆の思いは同じであり、その死を悔やむとともに、これからのソ連や共産党、そして自分たちの将来がどうなるのかを心配していた。しかも、そのような集会は早朝、深夜にかかわらず開かれることもあった。その時のことは次のように記憶されている。

スターリンが亡くなった時、夕方の5時頃にレジスタン広場にたくさんの人が集まり集会が開かれた。工場のベルが鳴り、泣いていた人もたくさんいた。（証言者No. 21, ロシア人, 女性, サマルカンド）

一方、ブハラでは以下のように記憶されている。

私は小さかったので、スターリンのことや彼がやってきたことなどはあまりよくわかっていなかった。私が覚えているのはスターリンが亡くなった3月3日だ。

ブハラ市の赤の広場に行くと、寒い日にもかかわらず、大勢の人が集まっていた。皆彼を信頼していたし好きだった。ほとんどの人が泣いていて、その泣き方は尋常ではなく、まるでスターリンの後を追って命を投げ出す覚悟をしているかのような印象を受けた。（証言者No. 50, タジク・ウズベク人, 男性, ブハラ）



彼らにとって、スターリンは父親のような存在であり、彼抜きに自分たちの生活を想像することはできなかった。スターリンはもっとも国民の感情に近い指導者であった。そのイメージが維持できたのは、いつも同じ服装をしていたことと関係が深く、私欲のない彼の性格の現れであるとみられていたからだ。そのイメージとカリスマ性もあり、彼の存在は多くの人にとって精神的な支えであった。それだけに、彼が亡くなった時、パニックを起こした人は数え切れないと言われている。

スターリンの写真は各家庭や国家機関に飾られていることから、彼に対する忠誠心や信頼、尊敬がどれほど強かったかが推測できる。以下は一例にすぎないが、スターリンが亡くなった時の状況を表している。

隣の家にリダという女性が住んでいて、スターリンが亡くなったと聞いて、彼女は恐ろしいほどの悲鳴を上げた。それは泣いているのか叫んでいるのかよくわからなかった。

私は年端もいかない子どもで、母にスターリンが亡くなったと聞いても、私にとってのスターリンはどこに行っても壁に貼られた写真にすぎなかったため、その写真がどうやって死ぬのか不思議に思っていたくらいだ。（証言者No. 13、ウズベク人、女性、タシケント）

このような証言はあるロシア人が思い出す以下の証言と一致しており、当時のスターリンに対する尊敬度はソ連全域において非常に高かったようである。

党の努力（広報活動）によりスターリンに対する国民の愛情は最高位までに盛り上げられた。私は党の仕事をしており、スターリンに宛てて様々な会議で読み上げられた手紙をよく書いた。そのような手紙は、嘘の影などない、心の底からの信頼と尊敬を込めた息子のような気持ちで書いていた。彼の演説や本は、構成が簡単で内容がわかりやすい、彼の大祖国戦争における指導者としての役割と才能、彼の鉄のような固い意志、国民の敵や、規律を破る者に対する措置などは歴史的な重要性があり、国に秩序をもたらした。スターリンの闘病と死の日々の間、ひと時も欠かさずわれわれはラジオの横

に座っていた。彼の訃報を子どものように泣きながら聞いていた<sup>1)</sup>。

スターリンの死は、多くの人々に不安をもたらした。その理由として、まずスターリンの存在が安定を象徴していた。前出の証言にもあるように、スターリンの指導期にウズベキスタンを含むソ連は貧困や経済の低迷、低い識字レベルから、第二次世界大戦の勝者で経済大国となり、人々の生活水準が日夜向上する国となった。これらの成功の多くは、スターリンの指導スタイルと彼に対する大勢の人々の信頼にあり、彼の死が人々にもたらしたショックと不安の原因となった。スターリンの一般国民とそれほど乖離していない金銭感覚（いつも軍服着用でおしゃれをせず、不動産を持たず、ほとんどの時間を仕事で過ごしたこと）が一般の人々から尊敬を得、彼に対する全面的な信頼と、スターリンの政策の被害にあった人に恐れと脅威を生み出した。それとは対照的に、共産党内には恵まれた生活を送る人もいたが、彼らと比べてスターリンが国の最高指導者で際限のない権力を有していたにもかかわらず、その権力を私物化していなかったことが評価されていたのである<sup>2)</sup>。

### 2.3 国民の喜び

スターリンの死は人々に悲しみを与えただけではない。集団化の時代から弾圧の対象となり、シベリアなどの労働キャンプに送られた人は、その死を自由への希望として受け止めていた。強制されたので仕方なく大泣きした人もいたが、内心では喜んでいて、そのような喜びを表に出し、公にすることは少なかったが、以下の証言からそのような人々が存在していたことがわかる。

皆が外で大声を上げながら泣いていたことはよく覚えている。それを見ていた母が、あれは強制的に外に出されて、泣くように言われた人々だと教えてくれた。（証言者 No. 31, ロシア人, 女性, アンディジャン）

1) Natal'ya Kozlova, *Sovetskie lyudi : Stseny iz istorii*, Moskva : Evropa, 2005, 162-163頁参照。

2) 例えば、戦争中にもかかわらず、共産党幹部のみが使用できるリゾート地があり、多くの人々が食糧不足で死んでいく中で、このリゾートは食べ物で溢れており、食べすぎでお腹を壊した共産党員が出たことも報告されている。その一例については、Natal'ya Kozlova, *Sovetskie lyudi : Stseny iz istorii*, Moskva : Evropa, 2005, 268-269頁参照。

また、別の人にはスターリンが亡くなった日、皆が泣いて彼の死を悔やんでいるのを尻目に、弾圧を受けた人は、これまで自分たちが受けてきた制裁を思い出していた。彼らにしてみれば、それは様々な試練の終わりを意味し、スターリンの死は天罰であると受け止めていた。次の証言は、そのような状態を叙述するとともに、父親と息子のスターリンの死に対する温度差を感じさせるものである。

父はスターリンの死を悔やんで泣いていた私に、「泣くな」と言ってきた。父は集団化で持っているものすべてを国に預けたが、それでも警察や検察にまだ財産があるだろうと疑われ、それを認めるよう迫られたという。

私の祖父は財産の一部を国に寄付し、その残りでアイスクリーム工場を作ったが、それが警察などの気に入らず、来る日も来る日も聴取によばれていた。彼に対する警察官の目は厳しかった。聴取の目的は祖父が持っていた全財産を国に寄付させることであった。祖父は3回呼び出され、取調べを受けている最中に、机の上で亡くなってしまったようだ。

父は祖父がどのような死に方をしたのか、同じ取調室に入っていた泥棒から聞いたようだった。（証言者No. 17, ウズベク人, 女性, タシケント）

強制的に移住させられた人や弾圧を受けた人の中には、本来ならばスターリンの死を喜ぶものを、皆と同じく大泣きしていた人もいた。

私は学校の7年生で14か15歳だった。街を歩いていると泣いている人ばかりだった。スターリンの政策で遠くから送られて来た人たちがいた。彼らはあの政策の犠牲者であったが、やはり泣いていた。（証言者No. 38, ウズベク人, 男性, フェルガナ）

こうした状況を説明するのは非常に難しい。人々は自分たちを苦しめたのはスターリンの指導のもとで動いたソ連政府だと考え、政府を恨んではいたもののスターリンを悪く思っていない。また、スターリンがいなければソ連はドイツとの戦争に勝つことができなかつたと確信している人も多く、複雑な

思いが錯綜していた。

しかし、それはスターリンが意図的に作りあげたイメージにすぎないと当時にも考えた人がいた。

私が覚えているのはスターリンが亡くなった日だ。私は学校からの帰り道、泣きながら歩いている大勢の人たちをみた。何事か！と思い家へ急ぎ、親に聞いてスターリンが亡くなったことを知った。

スターリンは国民を騙し、自分が皆の父親のようなイメージを人々の頭に植え付けたことは明らかだ。(証言者 No. 1, ウズベク人, 男性, タシケント)

## ま と め

スターリンの死は単に一人の指導者の死を意味していたのではなく、複数の意味を持っていた。多くの人からみて、スターリンの死は尊敬する、自分たちの生活と安全を確保してくれる人物の死亡であった。多くの回答者の言葉では、スターリンの死は父親の死のように受け止められていた。スターリンの死亡時に多くの人が泣いたり、ヒステリーを起こしたりしたことはスターリンの死に対する感情の現れだったと同時に、スターリンに対する人々の異常な忠誠心を象徴するものであると考えた人もいた。それは、スターリンの堅強な性格、第二次世界大戦での指導力、スターリン時代における人々の生活の正常化といった、スターリンに対する一般国民の好意的な印象に裏打ちされていた。特に、彼の第二次世界大戦中におけるリーダーシップを高く評価する人が多く、それがいまだに多くの人々の脳裏に残っているようである。

そのようなスターリン時代に達成されたことを認識する一方で、同時期にみられた弾圧や民族強制移住という、スターリンの二面性を認識する人も多かった。しかし、圧倒的に大多数の人々はスターリン時代に人権が脅かされ、多くが刑務所に入れられ亡くなったことに対しても、そのようなことはスターリンの知らない部分で行われた、もしくはスターリンが国民のために、仕方なくそのようなことをしてしまったという認識を持っている。さらには、そのような

ことがスターリンの過ちによって起きたとしても、スターリン時代には多くのことが達成され、それによって、その時代の失敗は許されるのだと考える人もいる。

最後に、スターリンの死を惜しむ人が多い中、その死を喜んだ人もおり、そのような感情が一部の国民の間にあったということは、一部の人はスターリンの支配を冷静に眺め、その死は新しい時代が近づいていることを示すものと理解していたといえよう。そういう意味ではスターリンの死は新しい時代の始まりでもあり、政治、経済と社会の変容をも引き起こすものであった。